

# 向きあう命

がん、そのとき ⑩

「哲学外来」提唱 樋野医師に聞く

## 患者との対話学がべきだ

「その準備は必要だ」  
 「医師の立場で告知をどう考えるか。」  
 「日本でも今は告知が当たり前になった。昔は病状を軽く言ったりしていたが、患者自身の人生だから、本人が何も知らないのでは、やはりいけない。医師の言い方とタイミングは配慮が必要だ。パニックになってもおかしくない状況だということを踏まえ、どういつタイミングで、誰と一緒に、どういつ場で伝えるかに配慮すべきだ」  
 「病状をありのまま伝え、医師や看護師らの態度で反応は異なることを医師は自覚し、患者との対話を学ぶ必要がある。余命何年とか、この治療をしながらどうなるか、今の医師は簡単に口にする気配がある。予後というのは確率論にすぎない。患者が自分はどうなのか知りたがるのはもちろんだが、(予後は)統計的なデータであり、個別差があることを踏まえて伝えなければいけない」  
 「家族は患者にどう接するべきか。」

「何カ月、何年と悩む患者もいれば、1週間で立ち直る人もいる。いずれにせよ、患者のすべてそばの人の存在は大きい。医療従事者は常に患者を見ることはできない。家族の役割は大きい。そばにただいて、会話はしない。一緒に30分間の沈黙を、苦痛と感じずにいられるような、身近な人がそばにいてあげてほしい」(聞き手・西脇和宏)  
 〓 向きあう命 第一部 「がん、そのとき」おわり

「がんイコール死」という人は多いが。

「病理医として、さまざまながんをみてきた。がんにはゆっくりにしたのもあれば、進行が早いものもあるが、告知されたショックは大変なもので、治るがんでもそれは同じだ。年齢も関係ない。ただ、若くても淡々と受け入れる人もいる。個人差が大きい」

「がんは突如としてやってくる。病気がどっかにかかわらず、どう生きるかの人生観を勉強しておく。人間として生きていけばいろいろな苦難がある。若い時



がん患者とよくばらんに話そうと設けられた「がん哲学外来」で、患者と話す樋野教授(福井市の泉済生会病院)

2011年12月7日(水) 福井新聞